2021年度北陸ユネスコスクール実践交流会　議事概要（案）

【主催】　北陸 ESD 推進コンソーシアム　石川県ユネスコ協会
【後援】　ESD 活動支援センター　中部地方 ESD 活動支援センター、国連大学 OUIK
　　　　　金沢市教育委員会　富山ユネスコ協会　ふくいユネスコ協会
【日時】　2021年12月4日（土）14:00～16:45
【場所】　オンライン Zoom 会議
【出席者】学校関係者、大学関係者、教育委員会関係者　JICA 関係者など約30名
【会議の概要】
1.開会挨拶　北陸 ESD 推進コンソーシアム　加藤隆先生
　　　　　　中部地方 ESD 活動支援センター　原　氏
2.実践発表
①富山市立楡原中学校　教諭　鈴木友之
　「身近な SDGs と私たちのかかわり」～海の豊かさと神通川の上流との関係～
②珠洲市能登 SDGs ラボ　サブコーディネーター　高真由美
　「能登 SDGs ラボ　珠洲市 SDGs 学習の取組について」
③坂井市鳴鹿小学校　教諭　佐藤秀幸
　「鳴鹿 SDGs～今、ぼくたち、わたしたちにできること～」
④ゲスト　長野県山ノ内町教育委員会　学校教育係　小林　妙子
　「長野県下高井郡山ノ内町の実践～ESD 通信作成を通じて～」
質疑応答から
　楡原中学校の海岸のごみ調査の方法が、富山にある NPEC から習った調査方法を習い実際の海岸で実施したことは、国際的に標準の調査方法だと思われ、中学生が調査した結果として一つの治験として、NPEC に提供することで広く情報の共有がはかれる可能性がある。ごみを拾ったことだけじゃなくてある意味学術的に価値のあることを生徒がしたという事を意味付けてあげることが重要との話が提供された。

3.グループワーク（実践の共有）
グループ1
　能登 SDGs ラボの高さんに話題提供してもらい、学校現場で取り組んでいることの中でどんな課題があるか話し合った。教員の温度差、学校の取り組みの差などをキーワードとし話し合った。自分事というキーワードがそれぞれ出てきたが、教員が自分事にできるかどうか、取り組み易さがあるのかどうかということでは、現場の先生から、実際に取り組んでいる状況の中で、自分として積極的にできることでやりやすい課題の学年と、なかなか取り組みにくい課題と学年もあるとの話も出た。自分事・交流をいうキーワードでの珠洲の状況では、珠洲市では全市のすべての学校でやることになっており、市役所や地域の応援が多いということもあり、ラボとして支援していく時には比較的にうまくいっており、先生たちの反応もいい。学校においては探求の学習の中で SDGs や ESD の取り組みをされているだけなんだけど、珠洲市では全部学校にお任せでは

なくて　SDGs ラボの応援、市役所や地域の応援という意味でも応援がある。

グループ 2

　鳴鹿小学校の実践については、基本的な要件、資質能力とか育てるべきものが明確になっていて、評価まで子供たちがしっかりと取り組んでいて非常にいい。今後、中学校との関係をしっかり考えて学習を 9 年間続けていくと考えることが必要だとの話が出された。長年の蓄積が生きている学校になっている。自学ノートの取り組みも、今言われ始めている e ポートフォリオにつながる非常に面白い取り組みであって研究の課題であったらおもしろいのではとの意見も出ました。まほろばフェスティバル、地域とのまほろば協議会が伝統的につくられてきていて、地域との関係が密着していて非常にいいと思った。その中で子供たちが見守られながらも鍛えられて必ず学年間での発表、まほろばフェスティバル地域で開かれた場での発表などを 6 年間継続していくのはいいとの意見もありました。他の実践の方々にも聞いてみたいんですが、子供達は SDGs について学習している ESD について学習している実感があるのか、地域の方たちは学校でこういうことをしていると理解していうのか、地域と学校との乖離とまでいかないが、通常の繋がりは強いが、こういうところではどうなのか聞いてみたいと思ったところで時間がきた。

グループ 3

　山ノ内町の取り組みについて話し合われ、学校間で多様な人が交流し合って地域に貢献する取り組みをして素晴らしいなという話がありました。教職院大学院の先生から、SDGs・ESD の実現には管理職の関わりが重要なのではと質問があり、校長として勤務されていた小林先生から校長会の中で校長・教頭 ESD の担当グループ 8 人がいて、そこを中心に町全体で取り組む、管理職が関わっている、そこの行政全体での取り組みがされていると勉強になった。
また、いろんな実践を聞いて ESD の取り組みかたを学ばせてもらった。3 つの学校の共通点　「自分事」があるのかなと思った。自分事になるためには、どうしたらいいのかなと毎年考えているが、今日の発表を聞いてあるひとつが頑張るのではなくて学校間であったり、行政間であったり連携して一貫して取り組むのが自分事につながるのかなと思って学ばせてもらった。

グループ 4

　楡原中学校の取り組みについて話し合われた。授業に取り組むきっかけは何かということから始まった。鈴木先生が将来、成人になったときに SDGs とはどういうことなのか、知ってることで、子供たちの事を考えての取り組みだったとの話があった。他の参加者からは、これからの若者たちの職業選択の基準は大きい会社ではなくて将来を見据えた企業であるかそういうことが基準になるのでそういう意識を持って子供達生徒と接していく学習を進めていったらいいのではないかという話があった。子供達が自分事として授業を進めていくための心の持ちかたというか持たせ方というか、どんな風にしたらいいかしっかり調べたいというテーマを持たせることが大事なんじゃないかなという話だった。ごみ問題については身近なところに関心が向きがちだが、海に目を向けて、陸と海がつながっているというそういう視点で気づかせるような授業のしくみ方、

楡原中学校の実践が参考になった。JICA 関係者からは、いずれは SDGs が当たり前になり SDGs という言葉さえどうなるのか、10 年後の事を考えて進めていく時に未来はどうなっているのか未来志向でいくか、身近な問題を課題として追及していくか両方の方法があるのではないかという話があった。

４．全体交流

現場にいた人間として反省させられるものがある。実践的な話がいろいろ出てきて勉強しました。自分事として子供先生が取り組むにためには、どういった思想に基づいているのか、どういった原理をもったものなのか　ESD そのものが一体どういうものなのか背景にあるものをしっかり捉えないと結局それだけで終わってしまう、長続きしない。自分事としてその時は捉えたとしても長続きしても ESD にならないものになってしまうと思う。僕は理論を必ず現場でちゃんとしたうえで実践する人も目的や意味を確認したうえでやらないとトップダウンでやろうとしてもなかなか長続きしないと。主体的、対話的な学びをと子供たちに言いますが、教員自身にとっても同じだと思う。教員自身が本気になればやっぱり子供たちに伝わると思いますから、本当に今日の実践も地域とつながった素晴らしい実践があったが地域に根差している実践は長続きするはずなんだが、だけど、それが長続きしないというのは統合問題があったり、今日の実践は地域とつながりやすい学校が多かった。大規模校になればなるほど地域に根差したってものが難しくなる。本当に地域に根差すとなれば統合の在り方、先生方の取り組み方を主体的、対話的にものにしていくのは必要なのではないかと感じました。

すごく面白い話を聞かせて頂いてありがとうございました。体系の中で実践の位置づけをわかったうえでやるということが重要なのではと私の中で気づきがありました。地域に根付くというのが大事ということ中で、ユネスコスクールがトップといいますが、地域の発信源のひとつという点では地域に還元ということが重要なのではと思います。その時に ESD がやっていることがそう違ってないと思っていて意味付けが違う方角から見るというのが ESD じゃないかと思っているので、そんな観点からの議論がこれから進むといいなと思いました。

学習している児童生徒は、SDGs・ESD を学んでいるという理解をしているのでしょうか。

子供たちが SDGs・ESD の学習を理解しているのかという話ですが、楡原中はユネスコスクールとして行事や学習において組んでおります。今回の実践においても子供たちがより SDGs ってものが世界的な問題だけでなく身近な問題でもあると気づけた実践になったんじゃないかと思います。地域やそのような実践を理解しているのかという話がありましたが、本校では HP で積極的に発信したり、各学年で取り組んでいるものを保護者の方、地域の方に発表会で発表し、地域とも関連しながら発信していきました。

今のに加えまして、楡原中では総合的な学習の時間で 1～3 年と様々な形で SDGs について学習しています。1 年生は海の豊かさ、2 年生は住み続けられる街づくり、校外学習に行ったんですけど、ただ体験するだけじゃなくてその地で住み続けられる街づくりについてご講演いただいたと。校外学習で話をきく機会を得たり、3 年生になるとすべてのゴール 17 の目標についてそれぞれが追求活動をすると、全学年で取り組んでいます。それだけじゃなく理科の時間の延長線みな

いな感じでエネルギーの問題、SDGs に絡めて 7 番 13 番のことについて先日講演頂いたりしていろんな総合だけでなく総合と教科を結びつける実践をしていると、取り組んでいるとお伝えしたくてお邪魔しました。

楡原中の取組に関心をもちました。一言でいうと学習を超えてるなと思いました。その意味は社会的な責任を果たす活動にまで広がっているのではないかと思いました。知ることだけでなくて行動し自分たちでデータを集めて調査して発信をするということが取り組みとして大変優れていると理解しました。企業が社会的な責任を果たすことが今評価されれるうえで重要な取り組みになってますけれども、こうした取り組みは学校が果たす責任として学習というものが地域の課題解決に提案をするような取り組みになっているなと理解しまいた。学習の多くは生徒が自分が身につけて閉じて終わるということが多いかもしれませんが、こうした取り組みはそれを超えて大きなインパクトを与えるんだなと改めて確認することができました。これからも展開されていかれると思いますので、楽しみにしています。

講評

・金沢大学　加藤隆弘

実践発表ありがとうございました。ひとつ大事にしたいこととして、改めてわかりなおす、気づきなおす機会をそれぞれの実践の中で子供たちが実感しているんじゃないかなと思います。SDGs は 2030 年までにゴールをやっていくぞとバックキャスティングの考え方で項目としては降ってくるんですけど、実際に身近な自分の地域の事を調べて、こう言う風にゴミがなっているぞ、海側に流れて行ってこうなるのか、自分の足で調べて考えてみる、そういうところを地道にやって、わかったつもりでいたけど、身近な地域に出て自分の目で見て、自分の手で調べてなるほどそういうことかと実感とともにわかりなおすことができているのかなと感じました。そのあたりをいろんな教科や総合、探究の学習の中で埋め込んでいって子供たちがわかり直しの機会を持っておく、実感を理屈、理論、世の中で起こっている様々な事とつなげていく、そこをどんどん濃くしていくような取り組みというのが非常に大事であるということを今回も改めて教えることができました。

2 つ目になるんですけど、自分事とする、当事者意識、自分もそれについて関わっていけることはないのか考えていけることはないのか、頭でも理解し、自分でも実感を持ったうえで、自分にできることは何なのか、行動変容、自分でも考えられるところ、繋がって調べていけるところ、そういうところに動き出すというところに 4 つの実践それぞれが繋がっているのかなと感じました。

4 つの実践、そのまわりにあるたくさんの素敵な実践をお互い交流して、知って、子供達も、大人たちも、先生方も改めてこういうところを大事にしたいなと、子供たちがこんな風に動いてくれるようになるといいのかもしれないな、そのためにはこんな風に私たちも取り組みたいなということの見通しを持ちながら動いていけるそんな情報提供、交流をより進めていく、SDGs・ESD 推進のためには必要なのかなと感じました。

・富山大学　成瀬喜則

自分事や交流が 4 つの実践のキーワードだったかなと思い、素晴らしい実践が続いたなと聞いていました。教員のワークショップであったり、学校間の交流であったり、小中学校の交流であったり、いろんな交流から教員と子供達が自分事として捉える取り組みがありました。その中で先生がどうしていいかわからないという場合、外部の力を借りていくのは非常に大きな力になっていくということを感じました。長野県山ノ内町の発表のように教育委員会から発信して頂けるのは教員にとって大きく頼りになっているのではないでしょうか。
そういうことを総合的に進めていけば ESD というものが大きく広がっていくという感じを受けています。

・金沢星陵大学　新　広昭

４つの実践で共通していたのは「豊かな発想力を引きだす」ということを目標にしていたことかと思います。SDGs は 17 の目標があり、そのすべてが関連しあっているため、一つの目標を実現しようとすると必ず他の目標とのトレードオフ（あちらを立てればこちらが立たず）が生じる、そんな関係にある。楡原中の発表の中で、プラスチックごみが多い→過剰包装が問題ではないか、生徒がそこに行き着いた。そのこと自体はとても素晴らしい気づきですが、過剰包装も日本の感謝の気持ちを包むという文化、伝統をベースにした行為なので、世の中的には必ずしも一方的に包装をやめるべきということにはなかなかならない。そこにはトレードオフが生じているので、そのトレードオフを生徒たちがこれまでにないイノベイティブな発想でいろんなリソースを使って解消するアイデアを生み出す発想力をひきだすことを目指していく、それが SDGs を教育に取り入れていくことの本質、真骨頂ではないかと考えています。そう意味で、鳴鹿小学校の「一手少ない指導」という考え方、これは非常に素晴らしいと思いました。子供たちの発想を引き出していく、そのために教員の方が一歩下がるというか一手少ない指導をしていくと、これがこれからの SDGs・ESD の教育には必須ではないかと切に思いました。

・国連大学 OUIK　永井三岐子

去年から参加させて頂いてさらに取り組みが進んでいるなと印象です。共通点は外部の方が上手く学校に関わっていらっしゃる、つまり地域の方が教育に関わっていらっしゃるというところだなと思いました。私は学校のものでも教員でもないので、外からの視点になるんですが、それをいかにもどの学校でもやりやすくする仕組みを作っていくか、資源を投入していくのか大事なのかなと思って聞いておりました。今コロナ禍で ZOOM を使わざるを得ない状況ですが、一方で強力な武器ですよね。子供たちが世界中の人たちとつながることができるという武器なので、学校は IT を使っていければいいのかなと思いました。子供たちが自発的な学びを得るためには周りの大人・先生たちが学ぼうとする姿勢を見せる、自分たちも変容するという姿勢がないと子供たちに伝わらなくて、なんとなく SDGs ぽいことをやっておけばこの教科終わり、次受験の準備、じゃどこかおかしいので、そういうマインドが全くなく素晴らしい取り組みだったなと思います。SDGs というのは世界の課題の裏返しなんですね、そうすると何としても課題を解決する、言い

方悪いかもしれないがネガティブになりがちなんです。ジェンダーだ、環境だ、海が汚れた、それはもちろん大切な視点なんですが、子供達には圧倒的な自然の美しさであるとか、人間関係でいえば素晴らしい人と出会わせるとか、音楽の美しさとか何か圧倒的に守りたいというようないいものを体験させることも一方で大切なのかなと思って拝見しておりました。

s

５．講演「SDGs 達成に向けた ESD 及びユネスコスクールの最新状況」

ESD-J 理事　鈴木克徳氏

1. ユネスコスクールに関するユネスコの考え方
2. 最新の動向

（プレゼン資料）

閉会　今後の予定

1/22 石川県の交流会予定

2 月　富山県・福井県　県内の交流会予定

2/6（日）　成果報告会

挨拶　　　　　石川県ユネスコ協会　理事　今井